

空に連なる地平 (3)

—— まひるの歌 ——

津 守 真



人は壮年期に、自らの心の底の願いと現実に行われてることとの間に食い違いを体験し、その溝を埋めるべく戦う。一九六〇年代、一九七〇年代、幼児の発達と保育を専門としていた私は、自分が訓練を受けてきた実証科学の思考法と保育の実際との間に大きな食い違いを感じていた。私が

子どもとの間で最も重要と思ったものが科学の網の目からこぼれ落ちていた。私が子どもものの描画の研究からこのことを明瞭に意識したのは一九七〇年前後であった。東京で、ワシントンで、スウェーデンでの国際学会で、ひろく外国の学者と議論するうちに、人間科学には自然科学とは異なる



どもの話しを聞いている。子ども「バレーシューズがあたるといいな、そうしたらお誕生日に『かんむり』買ってもらうの」。その図は人から見るならば、父と子の寄り添う図と見えるだろう。私の身体の動きはひとつの表現である。夜ねるとき私は自身の仕事を中断して子どものベッドの傍らにしようとする。そこには子どもと共にしようとする心と、仕事にもどうとうする心が同時に動いている。父と子と共にいる図は心の葛藤を内にふくんでいる。じつと留まるうちに、私は子どもと語り、共にいることをたのしみ、無心の私になり、葛藤は消える。

子どももねたくない。だからぐずぐずと着替える。いつまでも私に語りかけ、そのうちに私との会話の世界になりきる。そのときその子どもは現実からはなれて、他の世界を夢みている。自分が舞い、飛び、身を飾る空想になりきる（靴は人を

別の世界に連れて行く）。私はその世界をかいま見る。これが父と子の寄り添う図である。生命過程は二面性である。

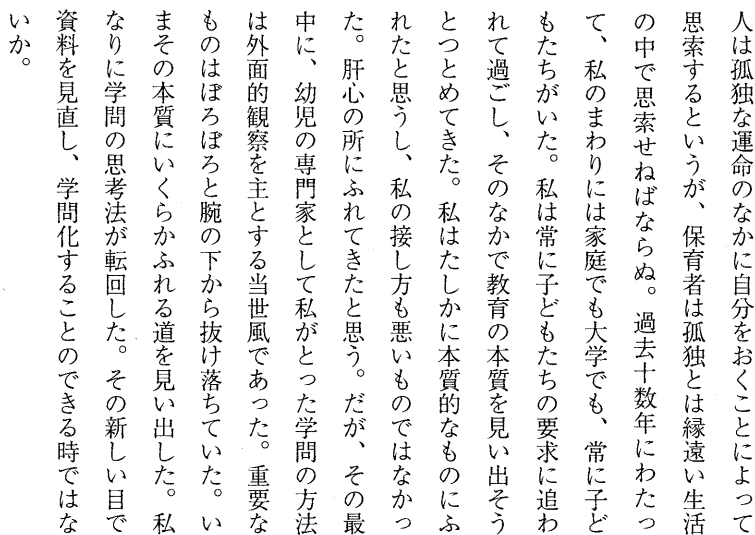
一九七二年十一月五日

子どもと共なる人生をふりかえる

日曜日の午後一杯、私は考えこんで何もしないで過ごした。子どもたちは風呂に入り、台所からは妻が焼き鳥を焼くにおいが流れてくる。

子どもがたずねる。「お父さん クリスマスプレゼントにもらいきれなほど もらったらどうする?」「家を建てかえるかな」と私は何気なく答える。子どもがピアノをとぎれとぎれにひく。森有正は、『バビロンの流れのほとりにて』の中で、





「ごはんができました」と妻が言う。私はこうして書いている。そんな時間がいま与えられるようになったのだ。孤独ではない運命の十年。それを考えることのできる時。いずれも私に与えられた時である。

一九七二年十一月六日 観察研究の序

観察研究の序を書いた（この頃、大学で毎週観察研究会を開いており、同輩後輩から私自身が啓発されることが大きかった）。

庭に雨が降る。雨の音。

私は觀察研究について書こうとしている。思えば長い道のりのことである。私自身がこもっていることである。心理学や幼児教育の根底にかかわることでもある。この数日、このときを迎えるべく苦しんでいたようでもある。サルビアの残花が赤い。

一九七二年十一月二十九日 資料の省察

幼少時代、青年時代の感動を現在にもち来たし、過去の現象の意味をさぐるうとする試みに最近入ってきた。そのみでなく、子どもたちの幼年時代を通りすぎ、幼稚園と格闘した資料を自分のなかにもって、その現象の奥にあるものをさぐるといふ専門的な仕事がいまや開けようとしている。それをあせらずにやろう。いま、材料を鍋のなかにいれてぐつぐつと煮ているところである。早く煮出しすぎてはならない。ゆっくりと煮ながら、調味料を加え、材料が変質してゆくのを忍耐づよく待たねばならない。小鍋の料理は少しずつできてくる。本鍋のはまだ煮始めたばかりだ。今日は大学の創立記念日、陽ざしが洗濯物に柔らかい。

一九七二年十二月二日 幼稚園の意義

幼稚園や学校はそこで子どもが人となりうる場

所でなければならぬ。すなわち、子どもがそこで自分の感じ方をする自由をもつころでなければならぬ。

一九七三年七月十八日 夢とその考察

一昨夜の夢

「木の根を掘り起こすと、やぶからしの根が太い根が木の根にからみついて、どちらが本物の根か分からぬほどである（やぶからしは、蔓性の植物である）。私は、その根を手でときほぐす。これではいまに地上の植物はすべてやぶからしになってしまふのではないかと思う」。

昨夜の夢

「私は何か自分の研究の報告をする。そのあとだれか現場の人の声がして『この研究には生命がな



い』と言う。私は憤慢を感じながら、それも本当なのかもしれないと思う」。

私は長い間、どこかに絶対的な知識の体系があつて、それを発見しあるいは、それを作り上げることに参加するのが学問であると思つていた。はつきりとそのように意識していたわけではないし、部分的にはその逆も考えてはいたが、どこかに右のような前提があつたと思う。しかし、少なくとも、子どもと人間に関する学問の分野では、そういう絶対的な知識の体系や法則があるのではなく、それを見い出すことが学問の課題であるのではない。もしもそうだとしたら、それを見い出した人は、それを他の人に教え、それに従つて考へることが教育者の課題となる。そうではない。人間の心という未知なる世界が広がっており、私はそれにふれて、自分にとつての意味を見い出すのである。子どもの行動にふれて、それは私に

とつて意味のあるものとなる。私はそのことの意味を何度も発見し直し、子どものひとつの行動の分かり方が、自分にとつてより根源的本質的なものにふれ、かつ、多面的になつてゆくのである。

教えるということは同型のものを作り出すことではない。相手が、その人なりに子どものことがよくわかるようになってゆくきっかけとなるのである。

このことを、きょうは、学生さんのレポートを一日ゆつくりと見ていて、自分なりに考えた。他人の体験を読み、または聞くとき、そのことから自分なりに考えることができる。その人と同じところで体験したならば、聞くだけでは違つたように考えることができるであらう。また、他の人が、その人の体験をその人なりに根源にふれて、いろいろの面から考えたことを聞くことは、自分が自分なりに考へて行くのにためになる。それが

教えるということのはたらきである。

私は自分で体験し、自分なりに根源にふれて考
え、その意味を多面的に考える。それを語ってゆ
くことは、教えるということである。

一九七三年七月十九日 記録と体験の省察

きのうのつづきを考えながら、今朝から過ごし
た。いま西陽が庭に射してきた。愛育研究所の家
庭指導グループでは目の見えないSちゃんと出
会った。今朝は発作を起して眠ってきたので、寝
かせたまま遠目に見守っていた。

Tくんと一緒に怪獣の本を見た。Kくんは衣服
を脱いでトランポリンをしていた。二〜三人裸の
子があり、これでKくんも人目を気にしないで遊
ぶようになったと思う（『子ども学のはじまり』
の中の「衣服の意味」の記録はこの頃のものであ
る）。

子どもに直接にふれ
る体験は、本当にあり
がたい。日常の大人の
なかでは得られない、
なまの人間が向こうか

らぶつかってきけるのである。その子どもた
ちと共に、生きることは、体験(erleben)すること
である。自分の目標を固くもってそれをさせよう
と思ったり、いわゆる社会の善悪の基準を両手に
もって、こうすべき、べからずと思っていたので
は、子どもとのじかのふれあいの体験とならな
い。それをすてて、じかのふれあいにおいて、感
ずるものをとらえるならば、豊かな体験となる。
保育の現場から一步はなれて、保育のことを考
える。そのときは、漠然とした動きの感じがある
のみで、とりとめもない。思えば保育の直後はい
つもそうだ。放心したようになって掃除をする。





そのときに、もっともらしい理論を述べるのは場違いに思える。ひとときの後、お茶を呑みながら自分の体験を語るゆとりができる。しかし、まだ思案にはならない。次の体験が重ねられるまでの余韻体験なのだ。保育の後、モノレールによって、Oさんの米国留学の旅立ちを見送りに羽田空港にいった。

一九七三年七月三十一日

まひるすぎ

まひるすぎ かつとした日射しの
ベランダをみつめて

私の幼い子どもたちの姿は見えない

母親と一緒に

小学生の子どもたちは

日曜学校の合宿にいった

かつとした まひるの
そのしあわせな日々を
追いかけてへとへとになって戦っていた
そのしあわせな日々を

子どもたちにまひるの幸せを与えたい
どの子どもたちにも

それは人生の花なのだ

まひるの太陽 子どもひたむきに遊ぶ姿
子どもたちが眠ってしまった 遊びのあと
何年も前に過ぎ去った 遊びのあと

私はこのからだで その遊びにふれてきた
いま この目の前に見えないけれど

たしかに私はその傍らにいた

それが目にみえなくなってしまう後にも
そこに大切なものがあったことを示すのは



それを証する人の存在と

それを伝えることばである

人の頭では証明できないこと

証明をこえることがある

〈このときから二十五年が過ぎた。〉

一九九八年八月二十日

保育者には、あるとき、活気のある現場をはなれる時が来る。子どもたちが成長したとき、保育者自身が年とった時である。その寂寥こそが人間の発達の現象である。保育の現場にあるときには、子どもの日々の必要にサービスすることに追われる。その必要がなくなったとき、保育者は本来の自分自身を取り戻す。静まって座し、人間の省察に心を向ける。そして気が付くことは、保育者は子どもにサービスをしている最中も、ひとり

の人間としての自分がサービスをしているということである。社会的な所属や役割はあっても、同時にそれを離れて一人の人間として子どもと向き合い、自分で見て、判断し、行動する。そのことがなくて、立場が判断し、自分自身を失ったら、人間の保育ではなくなる。

私は一生涯に幾度その転機に立ったことか。幼かった子どもたちは社会人になり、幼稚園、養護学校の保育で格闘した子どもたちも大人になり、福祉施設でかかわった大人たちもそれぞれ自分の道を歩んでいる。いま、福祉施設の仕事に力を注いだ年月も終えて、私は初心の原点に戻って老年期の自分の道を歩む。